

名古屋玄医 医案②

男、歳五十余、左足の跟 腫れ痛む。一医之を治し漸く癒ゆ。半載の後、また腫れ起こること前の如し、終に潰破するに膿水湧くが如し。数医 交々治すも応ぜず。一身倦怠し、飲食進まず、乱夢盗汗、席裯を安んぜず、予の治を求め、之を脰るに沈遅にして弱し。

八味丸料に人参・黄芪を加う。

右、参・芪 加倍し、一貼二錢強に調合し、水煎して之を用うるに百余貼にして、大験の後、補中益気湯を用い、六味丸 兼ねて施して、数十日を経て全く瘳える。

或いは曰く、玄医の方を用いるは補劑を専らにし功あらざるには非ず、豈に偏らざらんや。春抱曰く、夫れ足跟は乃ち督脈発源の所、腎經過ぐる所の地。上件の病者の如きは、其の化源を滋補せず。子 何れの劑を用いて之を治するや。丹水 上件の治方 尤も瑩かなり。彼の壁裡を穿って柱を添える類とは甚だ懸隔なり。